日本人学生の米国留学準備のための ソーシャルスキル学習の実践

○高濵　愛・田中　共子
（静岡大学国際交流センター）（岡山大学社会文化科学研究科）

【目的】　留学の量的拡大に伴い、質的充実が課題となった。我々は異文化適応促進および不適応予防の観点から、当該社会のソーシャルスキルの事前学習を行う心理教育に注目した。対人行動の文化的差異を認知・行動的に学習して行動レパートリーを増やし、留学先の対人関係の形成・維持・発展を支援したい。米国留学予定者を対象に、小集団によるアメリカン・ソーシャルスキルの学習セッションを試みたので報告する。

【方法】　設定：1 年未満の短期交換留学を予定する、日本のX大学の日本人学部生向けに、「アメリカ留学のためのソーシャルスキル：挨拶からアサーションまで」と題した研修への自由参加を募った。学習内容：アメリカ留学で必要なソーシャルスキル（田中,1994）から、短期留学生に必要性が高い８つを選択。時期：2007 年度夏期に 90 分間×8 コマを、週 1 回×３週間に分割し実施。参加者：全９人中、３週とも参加した５名が分析対象。男子１名、女子４名。ただしスキル１，５，６は１名ずつ欠席者あり。構成：認知行動療法の訓練方法（Lieberman ら,1989）を基に、アサーションの教育（平木,1993）や在日留学生向けのソーシャルスキル学習（田中,2007）を参考にした。課題場面を呈示し、英語でロールプレイを二度試みた。各演技後にビデオを再生してフィードバック、説明、質疑、まとめを行った。X大学に留学中のアメリカ人学生が相手役、助言、モデル呈示を行った。進行と解説は筆者ら、記録など補助役は日本人学生２名。各回の対話記録や自由記述の詳細は、高濵・田中（投稿中）他で報告。

【結果】　演技の自己評価（10 段階）をみると、１度目より２度目の得点が高い者が、スキル１（聞く態度）、スキル５（意見）、スキル６（要望）は各５人(100.0%)、スキル２（挨拶）、スキル３（友人作り）、スキル４（相談）、スキル８（断り）で各４人(80.0%)、スキル７（交渉）で３人(60.0%)。「自然な感じか」など演技全体の印象を尋ねるマクロ項目（各スキル３～７項目：10 段階）で、２度目の演技の方が評価の高い項目の割合（%）をみた。スキル１～８の順に平均 *(SD)* を記すと、66.8*(27.2)*、53.3*(39.4)*、34.0*(31.3)*、60.0*(46.2)*、65.0*(41.2)*、85.0*(19.1)*、80.0*(27.4)*、74.0*(37.1)*。「ｱｲｺﾝﾀｸﾄがとれたか」など演技の構成要素を挙げたミクロ項目（各スキル３～７項目：10 段階）の場合も同様に記すと、66.7*(27.4)*、36.7*(50.5)*、56.0*(43.4)*、56.3*(51.5)*、65.0*(41.2)*、62.5*(43.3)*、68.0*(33.5)*、72.0*(33.5)*。次いで意識の変化（12 項目）をみた。自己評価の得点（10 段階）が上昇した者の割合が高いのは、２回目セッションの前後では「遠慮しない方だ」(100.0%)、「英語でうまく主張」(80.0%)、「日米文化差を熟知」(60.0%)。同様に２回目セッション後より３回目セッション後に上昇が目立つものは、「アメリカ人の見方を理解」「アメリカ人の行動の仕方を理解」「英語でうまく主張」(80.0%)、「日米文化差を熟知」(60.0%)。

【考察】　自己評価からは、短期効果としてセッション参加による文化学習の進展と、パフォーマンスの向上の認識が読みとれる。長期効果の把握と、評価の精緻化・多角化が今後の課題である。

【引用文献】　高濵愛・田中共子「アメリカ留学準備のためのソーシャルスキル学習セッションの試み―対人関係の開始に焦点を当てて―」（投稿中）／田中共子（1994）『アメリカ留学ソーシャルスキル　通じる前向き会話術』アルク／他

【註】　本研究は科学研究費補助金（萌芽研究 No. 19653099 代表・高濵愛）の助成を受けた。